
誰かの語り

opitaru

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰かの語り

【Nコード】

N4075E

【作者名】

opitaru

【あらすじ】

魔法は消え去り、ただ、鉄と火薬と、そして怪物のみが残された世界。人々が魔法の存在を忘れ、残された力だけで、魔法が残した負の遺産と戦うことを余儀なくされた時代。この物語の語り部も、そんな時代に生きる一人である。彼の語りはどこへ向かうのか？そして、誰への語りなのか？

その1

私がこの物語を書き記すに至って、ひとつ言っておかなければならないことがある。それは、この物語が私を第一章節としている訳ではないということだ。

わたしの語りは誰かの読点から始まり、句点から始まり、あるいはandの後に始まる。orではない。その理由を今ここで説明することは可能だが、控えよう。それが、この物語を魅力的に語るコツだと学んだからだ。

ニヤメウイの街。(どうしてこんな変な名前をつけたのか?多分占領時下の名残だろうが、このセンスは私には、わからない。)

ここは、険しい山と山の間位置し、国の重要な防衛拠点のひとつとなっている。

実際、この街は戦時中の砦を利用しており、迷路のように曲がりくねった狭い道、石で組まれた強固な家壁、ところどころに設置された隠し砲台の跡が、当時の戦争に深くかかわったこの街の歴史を物語る。

私がこの町に立ち寄ったのは、私個人の意思ではない。交易のキヤラバンが、国の中央部で作られた優秀な武器防具を届けに来たのだ。

私はそのキャラバンの護衛だった。強力な武器防具を狙う盗賊や、そしてなにより、怪物による襲撃からキャラバンを守るために雇われた。つまり、いつものことだ。

交易都市コドリンの東門から出発した私たちは、街道を半日ほど行進し、一日と半分かかって砂漠地帯を抜け、出発後三日めの夕方、ニヤメウイの街にたどり着いた。道中はいたって平穏で、せいぜい酔っ払ったコリー^{オーナー}が雇い主に楯ついて減俸を食らっただけだった。

ニヤメウイの街の様子は、3年前に来た時と変わっていないように見えた。印象的だった朝焼けが、夕焼けに変わった程度。夕焼けも綺麗である。ところで、家よりも人のほうが早く死ぬというのは、そこに住む者たちにとって、どういう気持なのだろう。私の故郷では、年に一回はどこかの家屋が倒壊する。壊れたら付近の住人が協力し合い、2週間かそこらで、もう新しい家が建ってしまうものだった。

私は習慣として、立ち寄った町をぐるりと回る。そう、もちろん優れた傭兵がそうするように、町の地理を把握したかったのだ。酒場で一杯やつつけるのが目的なはずは、無いではないか？

ようやくそれらしいところを発見し、中へと進入する。中にいた者たちは少なからずぎよつとしたようだった。視線の先を見て、見ようとして、すぐにわかった。私の容貌がその視線の先にあると。体が健常でないのは、不幸なことではないといった何某がいた。ただ、不便なだけであると。たしかにそうだ。ただしそれは、右腕を失い、職を失い、生涯を共にするはずだったパートナーを失った境遇から立ちあがって、はじめて口にできる言葉だ。そして私は、座ったままだった。他の者が立ち上がり、去っていくのを尻目に。

思い出すのをやめて、店主に注文する。グイラン・レ・マルビス酒という、もう名前からしても**凄**い酒だ。^{スベリッ}ただ、弁明しておきたいのは、私が夜にもなりきららないこんな時間から、こんな酒を飲むわけではないということだ。

私はいつも、この酒を皮の水筒に入れて持ち歩いている。戦闘のときはこの酒で己の士気を鼓舞する。この酒は私にとって、まさに命の水なのである。だから、外が騒がしくなっても、店主がこの酒をカーヴから出してきて、震える手でこの小汚い皮袋に注いでくれるまで、私は動かなかった。

そして動き出す。あることを思い出したからだ。私は店主に、外の喧騒の原因を聞いた。一応、だ。店主は答える。

「あんたも逃げろ、怪物だぞ！」

店主が言い終わると、怪物がドアを破って侵入するのが同時だった。

私は、注がれた酒に一口つけ、右腰に挿した剣に手をかけた。

なぜ、こんなことを話したのだったか。そうだ、まったく変わらずに、ピースという言葉で10個ほど重ねたいくらい平和だったということを言いたかったのだ。閑話休題には、まだ早い。

その1（後書き）

あとがきを読むのは好きなわたしですが、書くのは苦手ですし、
そもそも、第一作でそんなことを書くのは心苦しいです。おこがま
しいです。

その2

怪物のシルエットは、黒と赤。薄暗い店内と夕焼けのコントラストだ。破られた入り口から差し込む西日がまぶしいが、どうやら人型であるようだ。長い影がY字型に見える。

両手をだらんと下げ、こうべを垂れたその様子は、己の行為を悔いているのだろうか？

いや、決してそうではない。その胸についた真っ赤な欠片をなめとる仕草は、これが主食としているものを指し示し、その両腕についた重量級の爪は、これがどんな方法で狩りを行っているのかを如実に物語る。

私は、もう少しこの怪物を観察する。重量級なのは、なにも爪だけではないようだ。全身のほとんどを、堅そうな皮膚でおおわれている。否、装甲と言ったほうがいいだろうか？しかしその分、動きは鈍そうに見えた。

怪物が顔をあげ、こちらを向く。と、一瞬のうちにこの生き物は、目の前の私に突進してきた。私の椅子は粉々になったが、私は右に逃れ、剣を抜かずに間合いを取る。

怪物は、破壊したのがただの椅子だと分かると、雄叫びを上げた。こちらを振り向き、巨大な爪で周りの椅子や机を弾き飛ばす。私のほうにも飛んできたが、剣で防ぐことはせず、私の防具で唯一鉄製の小手を使って受け流す。しばらくすると、怪物は作戦を変え、爪を構えた状態で、ゆっくりとこちらに向かってきた。

邪魔な調度品がなくなり落ち着いたのだろうか？私は戦う場所を変えようと、出口のほうをちらりと見たが、そこで怪物の行動の真意を知った。

椅子と机の残骸で、出口はとても通れそうになかったのだ。私は舌を巻いた。私の戦術とは正反対だったからだ。

視線を怪物に戻すと、怪物は笑った。獲物を仕留める直前の高揚感からだろうか。

「案外頭のいいやつだな」

私が話しかけると、怪物は更に口の端を広げる。

実際、よく考えられた戦術だ。この怪物の欠点である鈍重な動きを、見事に補っている。さらに、火砲でもなければ、この怪物の厚い装甲は打ち破れないだろう。

では、どうするか。実に簡単だ。

私は壁に向かって走り、壁を蹴り、怪物に向かって跳んだ。その際、剣を引き抜き、大きく振りかぶって、である。

怪物も、私めがけて爪を振りかざす。あと少しで、わずかに見える装甲のない部分に斬撃を加えられるか、というところで左の爪が当たった。怪物はついにおぞましい高笑いを上げ、満面の笑みで右の爪を突き出してきたのである。

そしてその爪は、途中で止まる。怪物の高笑いもだ。怪物が左の爪をみやると、その爪は切り落とされていた。

むろん、私の一撃によってである。しかし怪物は、どうして爪が無くなったのか分からないようだ。そして、その理由を悟り、死んだ。

怪物の思考をつかさどっていた脳を、強固な装甲で覆われた頭部ごと、私は真つ二つにしていた。

怪物が死んだことを確認すると、私は息を吐き、よろめきつつも剣を床に置いた。続いて小手をはずして、床に放る。ごとんという

音と共に、周りの土が震えた。

肩を回して筋肉をほぐしていると、カウンターの陰に隠れていた店主が、顔を出した。

「倒したんですか？」

「ああ、まあな。」

手近な椅子を立てて座る。酒を一口飲み、背もたれに寄りかかった。

「すごいですね、怪物を剣一本で倒せる人なんて、初めて見ました。しかも…」

「しかも、何だ？」

「い、いえ…ところで、ちょっとこの剣見せて頂けませんか？」

私はうなずく。店主が私の剣を持ったときの反応が見たかったからだ。

私の剣は、重い。傭兵が良く使う2・3ゴール級の剣の4倍はある。案の定、店主も持ち上げようとして、その重さに目を見開いた。見た目はごく普通なだけに、そのギャップは大きいのだろう。

そう、これが私が行き着いた、一人で、片腕で、怪物と渡り合う方法だ。

小手と剣に重量を集中させ、一撃の下に相手を叩き潰す。たとえ相手が鉄の鎧を着ていようが、関係ない。この破壊力は、火砲のそれに匹敵すると、私は自負していたのだ。店主は一瞬納得の言ったという顔をしたが、すぐに不思議そうな顔をした。

「失礼かもしれませんが…最近では、この辺りでも銃は手に入りやすくなりました。あなたはなぜ、こんなものを使っているのですか？」

私は答えないうつもりだったが、酔いが少し回ってきたのだろう。つい呟いていた。

「それじゃあ、相手を潰す感覚が残らないだろうか？」

その3

外に出ると、夜風が涼しい。キャラバンが無事ならば、とっくに荷降ろしも終わっている時間だ。少し気になったが、キャラバンは大丈夫だろう。あそこには、罰を食らってふてくされたコリーがいる。それよりも、さっきの怪物だ。

砦を基にしたこの町に、怪物が侵入するのはありふれたことではないはずだ。店主に聞いても、初めてのことだという。

私は迷路のような道を抜け、キャラバンへと向かった。夕闇の中、町門にほど近い場所にテントが見える。空の荷車と、ノハン数頭とコリー、それにほかの傭兵が二人ほどいた。

こうして名前を並べると、まるで彼も動物の名前のように感じておかしい。心の中では心配だったのか、彼らが無事だとわかり、余裕が出てきたのだろう。些細なことで笑えた自分がそこにいた。

「よお、もう交代の時間だぜ。どこ行ってたんだよ」
そう言いながらも、私がどこに行っていたのか、すっかりばれて
いるようだ。顔がにやついている。

いや、ばれている、というのは正しくない。何しろ、仕事中は飲
酒は控えるべきであるというコリーの正当な意見を退け、密かに例
のグイラン・レ・マルビス酒を飲ませてやったのは、私だからだ。

それを考えると彼の報酬を減らしたのは間接的に私のせい、とい
うことになりそうだが、コリーはそんなことを責めるやつではない。

私は、自分の仕事である町の偵察の報告を行った。

本来なら、形だけの偵察結果を話し、見張り組と酒盛りでもする
のだが、今回はそうもいかなかった。町で出くわした怪物のことを
彼らに伝えた。

「だが、まあ、よくあることだ。さして異常なことでもないだろう。そう言って私は軽く片付けようとしたのだが、周りの反応は、あまり軽いものではなかった。コリーなどは深く考え込んでいる。」

「なんだ、何かあったのか？」

「…実は、変な噂を聞いたんだよ」

私は少し身構えた。

「この付近の森に、最近やばい奴が住み着いたらしい。真つ黒い怪物で、一撃をぶちこもつとしても、煙のように消えちまうんだと」

「煙のように？どついうことだ？」

「しらねえよ、ただそう聞いただけ」

私も、少しいやな予感がし始めていた。コリーがこちらを窺うように見ている。

怪物の中には、全く常識を超えたものがある。学者のなんたらいう法則を、完全に無視している奴らだ（別に私は皆のように、科学を信じていない訳ではない。ただ、そういう例外は、常に存在するものだ）

実際私も、一度だけそういう奴に出くわしたことがある。奴はいきなり火の玉を吐き出してきたのだ。

「……っ」

思わず右肩を押さえてしまう。もう無いはずの右腕の痛み。

「おい、大丈夫か？すまん。こんな話しちまって…」

頭にこびりつく映像を振り払い、答える。

「いや、大丈夫。もう昔の話だ」

こついつとき、心配してくれるコリーが少し、うつとおしいと感じるのはわがままか。よく気がつき、信じやすく、人懐っこい。体格のいいその姿からは想像しにくいが、コリーはそんなヤツなのだ。

私の身の上話も、一度したことがある。酒の上の話だったにも関わらず、覚えていたのだろうか。

私はコリーと交代し、次の見張り番が来る夜明けまで、しっかりと見張りをしていた。酒盛りは、しなかった。

いつの間にか、うたた寝をしていたらしい。わずかに差し込む光が、夜明けを告げていた。物語をどこまで進めたか、一瞬分からなくなる。気付け薬として件の酒を飲み、ようやく思い出してきた。たしか、私のどうでもいい日常を、たらたらと連ねていったところだ。

しかし、そろそろ閑話休題、といこう。夜通し語り続けて、私の体力も続くかどうか疑わしい。

その4

テントから出てみると、既に大分日は高く、朝焼けは到底拝めそうにない。私は外で見張りをしている二人に挨拶をし、近くの食堂へと向かった。

ポーチの階段を上り、両開きの扉を開け中に入る。店内は香辛料の香りと煙が立ち込めており、またひどくうるさい。広いことは広いが、それ以上に人が多いのだ。

のぼりの階段を見つけたので、上に行こうかとも思ったが、そちらも同じような状況だろうと考えた。正直億劫だったただけだ。

偶然席が空いたのを見つけ、昨日立ち寄った店よりは大いぶ安物の、質素な丸椅子に私は腰掛ける。しばらくメニューを眺めていると、まだ決まってもいないうちに、給仕の娘がやって来た。

「おはようございます！ご注文はお決まりでしょうか？」

一瞬右腕に目を寄せたものの、あくまで平然と注文をとろうとする。その熱心な仕事ぶりとは、接客態度に私は、少なからず感銘を覚えたものだ。挨拶は返したものの、給仕の勢いに押されて、思わずなにか得体の知れないスープを頼んでしまった。付け合せには黒パンを頼んだ。そのスープと相性がいいらしい。

給仕の娘が去っていく。短いブロンドの髪に目がいった。

「……………」
聞きなれた話し声がする。懐かしい髪の色から目を離し、私はその声の主のほうを向いた。

コリーだ。一緒にいるのはそこから出会った奴らだろうか、数人で他愛もない話をしていた。その輪に加わろうとは思わなかったが、その会話は興味深いものだった。コリーが大声で何か言っている。

「……だから、魔法はホントにあんだよ！」

話を聞いていた者たちはもれなく笑い出した。私は抑えたが、思わずにやついてしまう。コリーはそういうことを信じやすいのだ。大方、以前出会った語り部のじいさんに吹き込まれたのだろう。

「ははっ！ おまえ、面白えなあ！ いまどき牧師様でもそんなこと言わねえぜ？」

「おい、魔法つて……空飛んだり海割ったりつていう、あれか？」

「それだよ、俺が言ってるのは。おい、そこ、笑うんじゃねえよ！ ホントだって。確かにおれの曾じいさんは魔法が使えたんだよ」

「なあ、魔法つて何だ？」

「デン・クレイの戦記物ぐらい読めよ、バカ。ようするに、まあ、なんだ？ 非常識な力のことだよ」

「非常識……」

私の中にふとした疑問が生まれた。私にもコリーの癖が移ってきたのだろうか。

デン・クレイの戦記物はたしか、魔法という不思議な力を使う主人公の男が、その力で悪の王国を打ち倒す、という筋のものだ。怪物こそ出てこないが、神の世界の獣が降臨する場面があり、その際、その獣も魔法を使っていた。

今考えてみると、クレイという男も、”常識を超えた怪物”の存在を知っていたのかもしれない。

だが、皮肉なことではないか。仮にあいつらの非常識さを魔法と呼ぶとして、それが使えるのは、奴ら一部の怪物だけだ。常識を超えた力など、人間には備わっていない。強い力を求めたければ、覚悟と努力が必要になる。そして、それだけだ。

彼らの笑い声が、私に重くのしかかってきた。

「お待ちせしました！ ウッズ・スープと、きのこ入り黒パンです」「え？……ああ、ありがとう。いくらだい？」

「えっと、8ワインと30ポロになります」

私はワイン銅貨9枚を渡した。

「数え間違いないよ」

「ありがとうございます」

私はこの朝食に取り掛かる。先ほどのお礼は社交辞令だ。きのこを食べさせようとする奴に心から礼を言える者はいないだろう。少なくとも私は、言えない。

一口食べてみると、ウツズ・スープとやらの方がおいしいことが判明した。黒パンも一口ちぎって食べてみる。もちろん、きのこのない部分だ。まあ、不味くはないが。

そのままスープの二口目をすすろうとしたとき、まだ隣に例の給仕がいるのに気がついた。

「どうかしたのかい？」

「いえ、あの……おいしかったですか？」

「ああ、おいしいよ」

スープの方は、という言葉を読み込む。

「よかった！ お客さん、その腕、ずいぶん苦労してるんでしょう？ だからサービスしようと思って、黒パンにきのこを入れてみたんです。おいしいですよ、うちの店のきのこ」

「……」

「あ！ 勝手に腕の話しちゃってごめんなさい。私ったら、気づかなくて……」

私の沈黙を、別の意味で解釈してしまったようだ。頭を下げ、しおれた様子で立っている。

「いや、気にはしていないよ、大丈夫だ」

そう言うと、彼女は顔を上げ、目を輝かせて厚く礼をいい、去って行った。

「そろそろ時間か……」

私は席を立ち、コリーに声を掛ける。互いに朝の挨拶をした後、キャラバンの出発時刻が迫っている旨を伝えた。

「しかし」

ポーチを降りながら、コリーが言う。

「お前もついに、新しい女を作るつもりになったかよ」

どうも、こちらに気づいていたらしい。私は、首を横に振り、先ほどの黒パンを半ば放るようにしてコリーに渡した。

「そんなものを入れるような小娘に、私が惚れると思うか？」

私は上を向いた。私のパートナーとの思い出を振り返りたくなかったからだ。いつもならば、忘れよう、忘れようと、ただそんな風にしか考えたことがなかった思い出をだ。

そんなことを考えられるようになったのも、コリーのおかげかも知れない。

「最後にあいつとデ」

「美味しいな、これ！きのこがいい味出してんだな、うん。」

……まあ、こういふところもあるのだが。

私たちはキャラバンに合流し、雇い主にこれからの進路を聞いた。

その5

「ですから、森を突っ切るのは危険だと言っているんです」

「ふん、時は金なりだ。商談は待つてはくれん。あんなでかい森を迂回していたら、一日が無駄になる。話にならんわ」

「貴方は命が惜しくないのですか。我々の護衛も、完璧ではないんです」

「商売なぞ、常に命がけだ。それに、そもそもお前らが遅刻しなければ良かったんだ。いいか、もし何か起きても、お前らは死ぬまで戦えよ。そのために高い金払ったんだからな」

「……もちろん、そのつもりです」

「あのデブヒゲジジイ、いけ好かねえ態度だな」

ノハンの引く巨大な荷車の隣を歩きながら、我々は愚痴をこぼしていた。結局、森を通ることになってしまったのだ。例の怪物のこともあり不安だったのだが、雇い主にはただの噂と切り捨てられてしまったのである。

一列に並び進むこのキャラバンには、ひとつの荷車に付き四人の傭兵がついていて、私たちは先頭、進行方向の左側についている。もう二人は右側を歩いているのだが、あちらでも何か話しているようだ。

我々が行進している森は、かなり大きな、古い森であるが、道はそれなりに整備されている。荷車の車輪の音が快調に響いているし、歩きやすい。

「しかし、魔法とはな。お前、そんなもの信じてるのか？」

「うるせえな、悪いかよ。曾じいさんは戦時中、魔法のおかげで生き延びたんだ」

「なんだかな、うそ臭いし、お前がそんな、頑なに信じようとする理由が分からないんだよ」

コリーが、しばし、沈黙する。

「分かんねえかよ、あの怪物共に、殺られたくないからだって」
「……」

「それに、うそじゃないかもしれないぜ。昨日、墓地に行ってみたんだ。そしたら、ほんとに墓があった。死んだのは、終戦後、半年ほど経った頃だった。死因は、酒の飲みすぎだとか」

私は、あることに気がついた。

「おい、お前の曾じいさんは、ニヤメウイで死んだのか？」

「ああ、そだよ。言わなかったか？ 俺の親父の代になって、コリンに移ったんだ」

「そうか……」

しばしの間。

「でも、もう魔法はいいんだ」

私はどういふことかたずねた。

「俺、結婚するんだ」

驚いた、というのは、正直な私の心持ちではなかった。

何度かコリーが手紙を書いているところを（こつそり）見ていたし、そんなものを普段から書くようなやつではない。

私はこの幸せいっぱい者の肩を思いつきり叩き、祝福のことばを贈ってやった。力が強すぎるとコリーは悪態をついたが、気恥ずかしさからだろう。変にゆるんだ顔になっていた。

「それじゃあ、死ぬわけにはいかないなあ。この契約で、もう傭兵はやめるんだろ？」

「ああ、あつちの家業を継ぐつもりだ」

強い風が吹き、木の葉が擦れ合う音が聞こえる。ごう、とあたりが震えた。木漏れ日が心地よく、まさにのどかそのものだ。

あまりにのどか過ぎ、それが現実なのか、過去の記憶なのか分からなかった。

唐突に反対側から、誰かが叫ぶ声。

「怪物だ！」

そしてその声を掻き消すように、火砲のような轟音が響いた。

先頭を歩んでいたノハン、数百ゴールはあろうかというその巨体が、ゆっくりとこちらに傾いてくる。私とコリーが潰されないように少し離れると、地響きのような音と共に、この家畜は倒れた。右半身は大きくえぐれており、その周りは真っ黒に焦げている。焼けた肉のおいが、辺りに立ち込めた。

そして、そして私は、見た。倒れた巨体の向こう側に、口から煙を吐き、こちらに向かってくる怪物の姿を。

「誰も攻撃するな！」

私はとっさに叫んでいた。銃を引き抜こうとしていたコリーを制止させ、前方にいる二人にも、注意を促した。二人はかなり動揺したようだったが、私の眼を見てどうにか頷いた。

「エサを食おうとしてるだけだ。こいつを食わせてやれ」

そう言って、ノハンの焼死体をあごでしゃくる。二人はめいめい臨戦体制のまま、怪物のために道をあけた。

一歩ごとに地面を震わせながら、怪物が近づいてくる。近くに来るにつれて、その巨大な体躯があらわになった。

「でけえ……」

思わずコリーがつぶやく。頭だけで大柄な彼の身長を超えているのだ。

四本足で歩くその怪物のからだは、とげとげした岩のようなうろこで覆われており、頭と長い尾っぽの先に、鋭い角がある。緑褐色の体色は、森に溶け込むための進化だろうか。

駆け付けた後続の傭兵たちにも怪物を攻撃しないよう言い、この場は一時怪物の食事場となった。

焦げた肉をさも美味そうに喰らうその様子は、私にとって見ていて気持ちの悪くなるものだった。

怪物が、獲物をあらかた喰い尽くした時、雇い主が遠くから叫ぶのが聞こえた。

「おい、なにしてる！ そいつを殺せ！ 俺の家畜を殺しやがったんだぞ！ 今がチャンスだろうが！」

数人が顔を見合せ、困惑した表情でこちらを見る。私は黙って首を横に振った。

「あいつは、イカレてんのか」

コリーが毒づく。

「おい、誰も動かんのか！ この、腰又ケの……金食い虫が！ 俺が手本を見せてやるわ」

雇い主が懐から銃を取り出すのが見える。皆の顔が凍りついた。

「やめて下さい！」

「オーナー！」

発砲音が聞こえた。弾丸は怪物の装甲に弾かれたが、怪物のプライドには、十分な傷をつけたようだ。地鳴りのようなうめき声、そして、ほとんど爆発のような叫び声が森中に響き、その衝撃波と大音量で、場の全員が一瞬、動けなくなる。

息もつかずに、怪物がその口から真っ赤な火球を放った。火の玉は、一番近くの、先ほど道をあけた傭兵のひとりに向かって、砲弾のような速さで飛ぶ。

直撃した火の玉が爆ぜ、彼を火で包んだ。

「っ！」

私は、叫んだ。めまいがした。

ねえ、ここら辺で、お昼ご飯にしない？

森近い、大木の陰。木を見上げる目の前の女性。私は武具を置き、息をついた。

そうだな、……腹も減ったし

彼女は小さく笑い、こちらを振り向いた。

その6

「キヤス、どうしてサンドウィッチにきのこなんだ？」

私がキヤスと呼んだ目の前の女性。共に人生を歩もうと誓い合った相手。

彼女が麻の敷布を広げている間にバスケットを覗いた私は、うめいた。

彼女はこともなげに言う。

「あら、あなたいつも偏った食事ばかりじゃない？ いろんなものを食べる事が大事です、って、料理の先生に言われたわ」

あいまいな返事でお茶を濁す。宮廷兵は実は大変なのだ、とか何とか、そういうことを言うつもりだったのだが。

手に取ったサンドウィッチには、バターで炒めたきのこ、庭園でとれたと思しき数種の野菜に、オーブンで焼かれた大きな肉の塊を薄く削いだもの（私の大好物である）がはさまっていた。赤いソースがかかっており、なめてみると、かなり辛い。

「つまみ食いしないの」

そう言う彼女は、敷物に座り、お茶を淹れていた。素足の白が、麻との対比でさらに白く見える。

私は一瞬見とれていたものの、つまみ食い、との誤解を与えたことを思い出した。

「いや、そんなことはしていないよ、ただ……」

「それは全部食べるように。いい？」

こちらを見上げ、挑発的な目で見てくる。思わずこちらも相手をじっと見つめてしまった。ちょっとしたにらみ合いの末、

「わかったよ」

負けてしまった。彼女が着ているワンピースのせい、彼女自身もふわふわした印象になっているが、いや、だからこそ、こういうたたかいはめっぼう強いのだ。油断してはいけなかった。

並んで座り、サンドウィッチを食べる。私はあぐらをかき、彼女は足をのばして。

久々の、のんびりした時間。

「ねえ、おいしい?」

「ああ、おいしい」

「そう言っただけで、うれしいわ」

「前より上手くなった。宮廷料理人を越えたよ」

きのこですら、彼女はおいしい料理に変えた、と思う。

「まあ! それじゃあ、私、コックさんにもなるうかしら」

「それはダメだ」

「なんで?」

「まあ、うん、なんだ?」

恥ずかしい台詞が浮かんでしまい、私は頭を掻いた。

「……ほんとは、美味しくないのね?」

彼女はその白い脚を折り、顔をうずめてしまった。また、誤解を与えてしまったようだ。

「あ、いや、そうじゃない。そうじゃないんだ」

彼女がちょっと顔を上げ、横目遣いでこちらを見る。申し訳なさと、少しの期待の入った眼、だと解釈してみた。意を決して、言う。

「……他の奴には、キャスの料理を食べられたくない」
息を呑む音がした。

「あら、ありがとう。お世辞でもうれしいわあ」

「冗談めいた口調とは裏腹に、こころないうつむいた彼女の顔は、ほんのり赤くなっていた。

さっきの解釈は、間違っていたかも知れない。

昼食後、日に照らされた野原を眺めて過ごす一時。

よく見ると、ところどころにピンクの花畑が広がっている。ふと、その花の名前が知りたくなった。

「あの花、なんて名前だか知ってるかい、キヤス？」

「え？……うーん、なんだろう。ちよつと行って見てみようか」
彼女が小走りで近くの花畑に向かう。なびいたブロンドの髪が陽光に貫かれ、透き通るようだ。私も手に持っているものを平らげ、立ち上がる。強い風が吹いた。心地よい風だ。

そう、このときも、風のような音が聞こえたのだった。

何かを感じ、後ろを振り向くと、それがいた。口を開け、のどから火炎をほとばしらせて。とっさに右手で盾を拾い、構えた。覗き穴から様子を見ようとして、次の瞬間、目の前が真っ白になった。

そして、記憶がまばらになる

彼女の声がして、意識が戻った。立ったまま気絶していたのか。まだ怪物はそこにいた。口から煙を出している。何をされたのか、体が動かない。いつの間にか、右腕ごと構えた盾がなくなっている。そう気がついたが、なにも感じなかった。彼女が近づく音がする。
「だめだ、逃げろ」

上手く声が出せない。怪物はまた口を開け、うなり声を上げた。さきほどの攻撃を繰り返すつもりなのだろう。

逃げろ、逃げろ、逃げてくれ

何も出来ない自分が齒がゆく、何とか声を上げる。

「逃げる！」

目の前に、ふわりと広がるブロンドの髪。そこに映った炎が、揺らめく。こちらを振り向いて、そして……

「貴様　！」

真っ黒になつた元人間が静かに倒れる。私は駆け出した。コリーがなにか叫んでいる。上の方から、何かが降ってきた。虫型の怪物だ。人の頭大の大きさはあるのだが、そいつが飛んできた。見ると、横じまの腹の先に、長く、鋭そうな針がついている。

「くそっ！」

頭を下げ、紙一重でかわす。耳障りな翅の音が頭の上を過ぎ去つた。顔を上げ、火吐きの怪物を注視しようとして、私の精神はいやな衝撃に襲われた。

2、30体ほどだろうか。虫型の怪物が火吐きの周りを飛び交っていたのだ。

「あいつを援護するぞ！」

後ろの方で、武器を構える音がする。尻込みした者はいないようだ。正直かなり、ありがたい。

「この！」

「くらえ！」

数発の銃声が響き、虫型が二体落ちたのが確認できた。さらに、銃撃を食らつたのだらう、片翅が動いていない虫型を見つけ、小手で払うように殴りつけ絶命させた。飛ぶことができる分、脆い身体構造のようだ。が、火吐きの周りには未だ大勢の虫怪物たちがいる。攻めあぐね、いったん立ち止まる。と、唐突に風が吹き、地鳴り

にも似た音がした。

「まずい！ 皆よける！」

虫に注意をとられた隙をつき、火吐きが火炎弾を放ってきた。狙いはこの私なのだろうが、三度同じ技を見切れぬほど私は愚鈍ではない。やつの口腔が赤くゆらめくと同時に右側に転がり、放たれた巨大な火の玉を避ける。熱い風が、皮膚を打った。

転がりながら味方の方を一瞥すると、火炎弾の射線に入るであろう先頭の荷車が見えた。

火の玉が荷車を砕け散らせ、交易の品々は炎に包まれていった。

すぐに体勢を整え、次の攻撃に備えようとしたところで、私の名を呼ぶ声がした。コリーだ。

「おい、そこから離れる、アレをやる！」

アレ、が何のことか察した私は、急いで街道から逸れ、木の陰に身を寄せた。急に動いた私に対して、虫型たちが向かってくる。独楽の回転音のようなその羽音が近づいてくるのが分かる。

「伏せろお！」

轟音。続いて、空を切る鋭い音と、木の幹に何かが刺さる音が、ほとんど同時に複数聞き取れた。

木の蔭から身をひるがえした私は、想像以上の光景に目をみはった。

ほとんど2分の3近くの虫型が、息絶えていたのだ。見ると指先ほどもない小さな針が、無数に刺さっていた。残る虫型も、どこか飛び方がおかしくなっている。

私は思わずコリーの方を見た。

「さすが、武器職人の息子だな！ 前より凄い」

「元だよ、元！」

「はは、悪かったよ」

気合を入れなおし、火吐きの怪物に体を向ける。針は通らなかつ

だが、少し動揺しているように見える。恐らく、この虫の怪物はやつ
の手下なのだろう。

「よし、まずは虫共をせん滅するぞ！ 火の玉にも注意しろ！」

「わかった！」

「了解！」

意気軒昂な仲間たちの声を聞き、私は火吐きの怪物を睨んだ。

「絶対に、貴様等を、殺す」

怪物も鋭い目つきでこちらを威圧してくる。

この時火吐きは、私と同じ決意表明を行ったに違いなかった。

その7

私は酒に口を付け、状況を確認する。

残った虫は7匹。火吐きは道の中央に立ち、我々を威圧している。対する我々は、火吐きの攻撃に警戒し、間合いを取っていた。前衛は私も含め十人ほど。めいめいが武器を構え、その後方では、他の者たちが火砲の準備をしている。コリーも後方だ。

我々前衛は役割を分けた。すなわち、火吐きの注意を逸らす方と、その間に虫共を掃討する方とだ。当然私は火吐きの注意を逸らす方を選んだ。虫型どもの襲撃を避けつつ、火吐きに接近してゆくのだ。銃撃音が続くが、どうも当たっていないようである。

こちらはこちらで、火炎弾が味方に当たらぬよう、怪物の向きを誘導しながら接近するのはなかなか骨が折れる。

「こつちだ、怪物！」

火吐きがこちらを向く。隙を突いて全力で突っ込み、ついに相手を私の間合いの中に捉えた。

「うおお！」

かけ声と共に跳び、渾身の一撃を食らわせる、つもりだったのだが、火吐きがまたうなり始めたのだ。つんのめりながらも制動をかけるが、怪物は容赦なく火の玉を撃ってきた。

「うおお！」

先ほどとは違う意味の言葉を叫び、頭から滑り込んで、しゃにむに避ける。当たりはしなかったが、地面に伏しているところを虫共が突いてきた。転がり避けるのが精一杯。だが、それでも先ほどの爆弾の効果はあったようだ。何度か地面を転がった拳句、どうにか虫を追い払い、立ち上がることが出来た。

さらに、剣をふるう仲間の一人が、虫型を串刺しにするのが見え

た。こういう時ばかりは、軽い剣が羨ましい。

仲間の活躍に気を取られていると、右方向から虫型が二匹、並んで突っ込んできた。避けようとしたが、後ろを見ると、他の虫と戦っている仲間が見えた。

「チツ」

覚悟をきめ、剣に手をかける。左足を前に出し、体を右にひねった。ほとんど後ろ向きの状態から、左腕に力を込めて、ほぼ水平に抜き払う。

右側の虫の腹を切り裂き、もう一方の虫にもその切っ先が届こうかというところで、剣の間合いから外れた。すなわち、接近されすぎたのだ。私の左肩に、怪物の針が深々と突き刺さった。剣が手から離れ、そのまま飛んでいく。

「ぐっ、おおっ！」

針を抜かせる前に、私は左手で虫の翅を握りつぶし、飛べなくなった怪物を思い切り地面に叩きつけた。

虫型を殺し、私は膝をついた。左肩の痛みが、脈打ちながら襲ってくる。

「おい、大丈夫か？」

隣にいた仲間が声をかけてきた。

「ああ、大丈夫、かすっただけだ。油断するな」

明らかに穴が開いていたが、そう答えておいた。幸い、急所には当たらなかったようだ。まだ動かせる。

「！」

後ろから虫が突撃してくるのが、彼の肩越しから見えた。私の顔色を見て彼も察したが、私の計算では、反撃は間に合わない距離だ。

「避ける！」

私は怒鳴ると同時に、無理やり彼を引き倒した。攻撃から逸れるようにだ。

虫は私めがけまっすぐに飛来する。私はとっさに小手で身を守る姿勢をとった。しかし、針が激突するものと思っていた小手に、当たったのは怪物の破片、そして体液だった。

「よお、危なかったな」

私は左を向き、声の主のほうを見た。

「いや、全く危ないことはなかった」

「おいおい、助けてやったんだ。礼ぐらい言えよ」

「そうだな、ありがとう。コリー」

傍らにコリーが立っていた。手には煙の立つ銃。普通のものより大分銃身が長い。彼の後ろでは、火砲を火吐きに向ける仲間の姿が見えた。

その火砲はまたずいぶんと巨大な代物で、全鋼製、さらに、分解して持ち運べる優れものだ。そのためとどこどこに継ぎ目があるが、暴発の危険はない、という。口径はなんと従来品の二倍、威力は四倍、そして値段は16倍、だとか。コリーの受け売りだ。

私は仲間の手を借り立ち上がった。気つけとして酒を飲み、傷口にも酒をかける。

「虫どもは全滅させました、いけます！」

怪物の方を見ると、攻撃を引き付けてくれた仲間たちが後退している。コリーが銃口を怪物に向け、叫ぶ。

「いよし、今だ！ 撃てえ！」

ここら一带の全てが震えた。

真つ赤な砲弾は恐ろしい速さで怪物に向かい、そして直撃したはずだ。というのは何しろ、土煙で何も見えないからであるが。

だが、代わりに怪物の怒号が響き渡った。

「まだ死んでないぞ！」

「火の玉に気をつけろ！」

一瞬の静寂ののち、怪物の足音が轟き、土煙が揺らぐ。

火吐きが煙の中から突進してきた。向かって顔の右半分が潰れ、砲弾の痕は首筋まで続いている。

血を噴き出しながらも、怪物はあの破壊的な大声をはなつてきた。前線にいた傭兵たちが硬直する隙を突き、怪物が角を振り上げそこに突っ込んでいく。

三人の傭兵が逃げ遅れ、その中の一人は、まともに角の一撃を受けたようだった。それがとぶさまは、関節が自由に曲がる人形のようで、もはや人間がとる事の出来る動きではなかった。

他の二人は、直撃こそ避けたものの、怪物の、とがった岩肌にかすったのだろう。回転しながら地面に叩きつけられ、そのままぴくりとも動かない。

突撃の後、惰性でそのまま前進していた怪物が、ゆっくりと止まった。

「くそっ！」

周りの者たちが火吐きに向かっていく。

仲間の一人が、怪物の後方から斬りかかる。が、鞭のようにする長い尻尾で、いとも簡単に吹き飛ばされてしまった。

私も、戦おうとして、剣を手放してしまったことを思い出す。周りを見渡すと、遠くの木の下に刺さっていた。

急いで剣を抜きに行くが、後ろからは激しい戦闘の音が響き、走っている時間ももつたいたなく感じられる。

私はやっと木のそばまで行き、剣を鞘に収めると、全力で仲間のところへ駆けつけた。

戦況は思わしくないようだ。死傷者が増えている。木の陰に寄りかかっている者、地面に倒れている者。私は、それらの側を走り抜けた。

「第二弾準備、装甲の薄い腹を狙え！」

火砲の照準を定めている数人のそばを通り過ぎ、前衛に助勢する。怪物は怒り狂い、尻尾を力の限りに振り回していた。

ズン

大砲が火を噴き、怪物は腹をよじらせたが、
「まだ、倒れないのか……」

踏みとどまった怪物が、火砲隊の方を向いた。これまでにないほど激しい火炎が、口からもれている。

怪物の後ろに回りこんだ私は、火砲隊への攻撃を阻止するため、お留守になった怪物の尻尾に思い切り剣を振り下ろした。

「うおおっ！」

鈍い音がして、尾の根元近く、剣身が食い込む。血が噴き出し、一瞬遅れて怪物の叫び声。火炎弾があさつての方向に飛び去るのは見えたが、尻尾がうねり、私は吹き飛ばされてしまう。

「ぐっ……」

受身をとれず、地面に激突した。

どうにか身を起こし、剣を収める。体中が痛むため酒を飲み、痛みをごまかした。

「ん？」

見ると怪物の動きが止まっている。だが、目を引いたのはそこではない。

怪物の背中には、まるで鍾乳石のように発達したうろこが密集しているのだが、そのうろこがいくつにも裂け、パツクリと割れはじめているのだ。その中身は紅く、まるで大輪の花々が咲くようである。

そして、開ききったその花々は、炎をちらつかせ始めた。

「なにか、ヤバイ気がするぞ」

「おい、どうする？ 火砲の一発でもお見舞いしてやるか？」

「逃げよう、逃げようぜ！」

徐々に炎は激しさを増しているようだ。意見の大勢は、怪物から離れるのが賢明という判断に動いた。

「皆は下がっていてくれ。奴に止めを刺したい」

皆が振り向く。コリーが話しかけてきた。

「火砲、使うか？」

「いや、剣で行く」

「馬鹿か！……って言わねえと、あれだよな。流れじゃねえよな」
火吐きの背中から、火炎弾が噴き出した。放物線を描いて飛んで行き、地面に落下。とたんに爆発を起こし、大穴をひとつ、地面にあけた。

「まるで火山弾だな……」

「逃げろ！ 早く！」

最初は後ずさっていた者も、火山弾の間隔が短くなるにつれ、背を向けて逃げ出した。

私も走り出した。怪物に向かって。

四方八方で爆発が起きており、火吐きの背中からは、花火の打ち上げ音のような甲高い音が続く。

「むっ！」

すぐ前方で、爆発が起きた。煙で何も見えはしないが、構わず走る。爆音で耳鳴りがするが、関係ない。煙を抜け、私は怪物の目の前に躍り出た。

「……もう、復讐なんて忘れたと思っていたんだがな」

目の前の怪物は、頭部を地面に載せ、足を折り曲げていた。私が話しかけると、ゆっくりと頭を上げ、こちらを向く。

その目には、誇りと怒りと、そして凄まじいほどの、疲労が見て取れた。その間にも火山弾は一带に降り注いでいる。森の木にも引火して、怪物の周囲の森はまるで火の海だ。

「お前は、ここで死ぬ」

怪物は、低いうなり声を上げて口をあけた。あえぎながら息を吸い、それでもその口腔は、再び赤みを帯びてきている。

私は一気に間合いを詰め、怪物の顔にとり付いた。怪物の下顎に足を掛け、上顎に左手を掛ける。私は怪物の口の中を覗いた。どの奥から炎がちらつき、熱い息が顔にかかる。発射寸前の状態だ。肩の痛みをこらえ、怪物の頭の上に乗る。火炎弾が、足をかすめた。

「私が、殺す」

切っ先を怪物に向け、剣の柄を強く握る。砲弾で傷ついた右目を狙って、私はまっすぐに、その重たい剣を突き刺した。

その8

そう、そうして私は、私の愛するパートナーの仇をとったのだ
馬鹿な雇い主がいなければ、引き起こされなかったであろう、あ
の戦闘。

「……」

昨日のことにも拘らず、ひどく遠い昔のように思える。酒に口を
つけようとして、残りがほんのわずかしかないことに気がついた。
せいぜいあと二口、三口。

「ふっ、ふふっ……」

あの時、本当は私のほうがずっと、魔法を望んでいたのかも
知れない。

そう思うと、おかしさが込み上げてきた。

そろそろ、私の語りを終わらせよう。

燃え盛る森の木々。倒木のせいで、道もふさがっている。

私は道の真ん中に座り込み、何をしてもなく、炎を眺めていた。
しばらくの間、燃え盛る火の様子を見るのは暇つぶしになった。

が、なんとなく、息苦しくなってきた。空気が足りないのかも知れ
ない。体中の痛みも、どこか鈍いものになっていく。

世界が横倒しになる。いや、私がか。目を閉じれば、楽になれそ
うだった。耳鳴りだろうか。耳元で鉄砲を撃ったような、ひどい音
した。

「おい、大丈夫か」

意識が、遠のく。

目が覚めると、まず視界に入ったのは天井。左には明かり窓（と
いってももう閉めてあるが）、右にはドアと火の灯った燭台があり、
ほかにベッドが二つ、いずれにも傷ついた仲間が眠っていた。

まだ思考回路が整わず、目を瞑ろうと考えた矢先にドアが開いた。
コリーともう一人が　宿の従業員だろうか　水桶と包帯を持っ
て入ってきた。

「誰か、起きたか？」

小声でコリーがつぶやく。

「起きていない、誰も」

体を起こし、そう答えてやると、コリーはため息をついた。

「よかった、結構心配だったんだ」

「それはどうも。だが、私の怪我はたいした事じゃない」

「んなこと言ってる、傷口に鉛ぶち込むぞ。少しは頭のいい戦
い方しろよ」

「十分洗練された戦い方だろう？　おかげであの怪物は死んだ。も
う、森の道の危険は去った」

「ん、まあ、そうっっちゃそうだけどな」

「……」

あの怪物は、あのまま放って置いて、恐らく死んだだろう。私
が、仕留めたと言っことを否定しないのは、コリーなりの気遣いだ
ろう。

隣で、コリーと一緒に包帯を換えている従業員が、興味深そうに
こちらを見ている。

「森の怪物を、倒したんですかい？」

「ああ、倒した。でも、こっちもやばかった。何人も死んだ」

「……」

あの馬鹿な雇い主の所為だと、だれかれ構わずに吹聴することは
しなかった。

そうすれば他の生き残った者達に迷惑が及ぶからだ。

「でもよ、むしろ生き残れたのが奇跡、みたいなもんだろ？　こい

つが例の火吐きの話してなきや、皆死んでたかも知れない」

そう。火吐きも含め、ああいった特異な怪物は、滅多にいない。それでデマだと高をくくって全滅、というケースもままあるのだ。

私の包帯を換えていた従業員の手が止まる。

「え？ 火吐き、ですかい。それはどんな怪物なんです。黒い奴でしたか？」

「いや、黒と言うより、緑に近いかなあ。……あ！」

コリーがこちらを見た。私も気がついた。どう考えても、火吐きは噂の怪物の特徴と合致しない。

「まだ、いんのか？」

「……まあ、街にいれば、とりあえずは安心、だろう。それに、道を迂回すればいいんだ。オーナーも今頃は、考え直してくれているだろうしな」

包帯を換え終わり、従業員がおじぎをして退出した。

「じゃあ、俺ももう寝る。しっかり休めよ」

「……いや、ちょっと付き合えよ」

ドアに手を掛け、去ろうとするコリーを、私は引き止めた。ベッドから降り、靴を履く。それから、武具も身に着けた。とはいっても、剣だけだ。小手と皮鎧はやめておいた。

「外で一杯飲もう。月見酒だ」

私はそう言っつて、懐から酒を取り出す。

それを見て、コリーは苦笑した。

「どこにしまったんだ？ それに今夜の月はたいした事ない。イモみたいな形だった」

「ふん、月は月だ。行くぞ」

「でもよ……」

コリーがつぶやく。

ここは屋根の上。見晴らしがいい場所を見つけるのが面倒で、結局宿の屋根の上で飲むことにしたのだ。

コリーは足を屋根から垂らし、干し肉をくわえている。平屋根なので滑り落ちることはないが、子供のように足をぶらぶらさせることに保守的な私は、縁から少し離れた所に落ち着いた。

「よかつたな、奥さんの仇、とれてよ」

「奥さん“か。……そんな言うほど、あの頃、実感は無かつたな”
“そうか、新婚ほやほやだったんだな？”

「ああ、今のお前と似たようなもんだろう？」

コリーは頭を掻き、小さく笑った。その様子は私に、こいつが幸せいっぱい野郎なのだと思わせた。

酒を注いでやり、自分でも一口すすり、ため息をついた。

「仇を、とつたのか。だが……」

やはり、何も変わらなかった。劇的な心境の変化だとか、ばら色の未来が見えてくるとか、そんなことまで望んだ訳ではない。ただ、歩を進めたかった。前に、もしくは後ろでもいい、今いるところから立ち上がって、何処かへ行きかけたかった。

「なあ！」

私ははっとした。いつの間にか、眠りそうになっていたようだ。

軽く首を振り、立ち上がって、コリーのそばまで歩いていく。

「どうした？ 私は寝てないぞ」

コリーが、心持ち真剣なまなざしでこちらを向く。

「……大丈夫だって。お前、ちゃんと立ち上がれてるよ」

私は、自分が酔っ払ったのかも知れないと思った。

目の前のコリーが歪み、目の周りがかっと熱くなった。声もやけに震える。

「……そうか？」

「ああ、ちゃんと立ち上がってるよ」

キヤスとの思い出、最後に思い出すのはキヤスの最期だった。いつも、火吐きを倒した時ですらそうだった。だが、この時、最後に現れたのは、愛しいあいつの、無邪気な笑い顔だった。

「そう、か。　ああ、そうだったのか」

私は、やっと自覚した。自分は今、立ち上がって、そして泣いている。

コリーに涙を悟られぬよう、上を向き、月を見る。イモのような月は、ゆがんでもイモのようだった。

「ありがとくな。コリー」

「おう」

とめどなく流れた涙も乾き、私は、首を戻してコリーのほうを向いた。

そして、眼と眼が合った。

空っぽな、眼ともつかない眼。黒い、もやのような体。月の光を受けているはずなのに、その眼と口の中には、空恐ろしいほどの暗やみが広がっていた。

それは、コリーのひざ元の近くからその虚ろな顔を覗かせていた。コリーの足を掴んで。

「ん？ どうした」

コリーが気づき、絶叫する。

私は、骨の髄まで恐怖に侵された。

それはまるで、まるで

死のかたまり

その9

かつてない未知。

目の前にいるこの物体は、これまで遭遇してきたどんなものよりも、奇怪で、恐ろしいものだった。

「くそつ、放せ！」

銃口を、足を掴むその物体に押し付け、引き金を引くコリー。するとそれは煙のように拡散し、一瞬の後には再びコリーの足に絡みついていた。

「なっ」

黒い物体は、コリーを引きずり降ろそうとしているようだ。コリーは両手で踏ん張るが、身体は引っ張られてゆく。

「コリー、つかまれ！」

差し出した手を強引に引き戻そうとするが、上手く力が入らない。一瞬考え、痛み止めのせいだと気づく。

「くそつ！」

私はいまや、握力だけでコリーをつなぎとめていた。すでに身体は屋根の上にはなく、私が手を離せば、恐らくあつという間に、この黒いものに連れて行かれてしまうだろう。

「うっ、うっ……やばい」

見ると、黒いもやがコリーの胸あたりまでを包み込んでいる。喰うつもりなのか。

どうしたらいいんだ

おそらく、この黒い物体が、噂の怪物なのだろう。

この物体に対峙する恐怖がどれほどのものかは、コリーの反応からも分かる。

「……くそ、誰か、くそ、死にたくねえ、助けて、くれ。……フィリア」

うわごとを繰り返している。私もかなり困惑していた。いや、パ

ニツクになっていた、と言うのかも知れない。

だが、冷静さは残していた。私まで冷静さを失えば、確実にコリーは死ぬと、この悪寒が告げていたからだ。だが、握力のほうは、長くは続きそうになかった。手が、離れそうになる。

ぎりぎりの決断だった。

「コリー」

返事は期待していなかったが、コリーは答えた。だいぶ、ひっくり返った声だったが。

「な、なんだ？」

「……骨の1、2本は覚悟、だ」

私は手をつかみ直し、屋根から飛び降りた。

「な、そん」

コリーも、私と共に屋根から落ちる。その顔は、状況が状況ならばかなり滑稽に見えただろう。ただ、ちょっと見ただけで、何を伝えんとしているのか分かる顔ではある。

これじゃ2人とも死んでしまうだろうが

私もやはり、表情で返す。

まあ、落ち着け

実際は一瞬のことであり、すぐに激突した。地面ではなく、張り出したポーチの、布地の部分にだ。全身に衝撃が走る。布の裂ける音がして、二度目の衝撃。意識が飛びそうになった。

「うぐっ……」

徐々に目の焦点がもどり、ポーチの天井に空いた大穴と、そこから見える月が視認できるようになった。私は、自分がまだ生きていることに驚き、コリーが起きあがったことでさらに驚いた。

「なあ、おい、生きてるか？」

「ああ、黒いやつは？」

「剥がれた。おかげさまでな」

いかにも皮肉っぽい言い方が気になったが、そんなことで言い合っている暇はなかった。

中への扉と街中を見比べ、どちらに逃げるかを思案する。

「コリー、中に入るぞ。2人じゃやばい」

私は両開きの扉に手を掛けるが、動かない。鍵がかかっていたのだ。

錠を破壊しようと剣を抜こうとしたところで、再びあの悪寒に襲われた。後ろを振り向くと、コリーの姿がない、いや、視界の端にそれらしき影を捉えた。刹那のことだったが、恐怖に歪んだコリーの顔を、光のないもやが覆っていく様子ははつきりと見えた。

「くそが！」

剣を捨て、影が向かった方向へ私は走り出す。狭い路地には月光も差さず、夜闇が私の邪魔をする。必死に走るが、三つほど角を曲がったところで、完全に姿を見失ってしまった。

「コリー！」

Y字型の曲がり角で、私は叫ぶ。そして左の道を進んだ。

「コリー！」

今度は十字路にあたった。また左を選ぼうとして、足を止めた。銃声のような音が聞こえたのだ。

「逆か！」

回れ右をして駆けてゆくと、また銃声が聞こえた。今度はかなりはつきりと。

その音を頼りに、T字路を右に進む。しばらく行くと、教会前の広場に出た。広場の中心にいたのは、教会へとすべる黒い怪物だった。

「コリー、今助けるぞ！」

腕を振り、影に走り寄る。十分に距離を詰めたところで、私は思いつきり影に体当たりした。

視界が真っ暗になる。なんの手応えもない、と思うが先か何かに激突し、くぐもった「痛てっ」という声が聞こえた。

コリーだ

外に大きく腕を振り、コリーを突き飛ばす。コリーが影から逃れ

たことを感覚で知ると、私も体当たりの勢いのまま、影の体外へ飛び出した。

「ぶはっ！」

ちよっとの間のことなはずだが、ひどく永い時間に感じられた。月の光が太陽のようにありがたい。周りを見やると、コリーが倒れていた。意識を失っているのかも知れない。少し強く飛ばしすぎたのでは、という思いが胸のうちを去来した。

「おい、大丈夫か！」

コリーがぴくりとする。しばらくのち、頭を振りながら体を起こした。私は安堵し、再び声をかける。

「いやあ、助けられてよかった。消化されていたらどうしようかと思っていたぞ」

頭を打ったのだろうか。まだ頭を振りながら、コリーは答える。

「……痛つてえ。なにも、殴ること、ないだろ」

私の振ったこぶしが、コリーの頭を直撃していたらしい。

「悪かった、許せ」

「いや、ありがとよ。助けてくれ、て」

コリーが私のほうを見た。どうも、気づいたようだった。

私の首から下すべては、黒いもやに飲まれていた。そして私の体ごと、影は教会に近づいていた。

「な、マジか！ 待つてる、今助ける！」

そう言っただち上がり、走り出すコリー。タフなやつだ。例え影に捕まっていなくとも、私はもう、動けそうにない。

「心遣いはうれしいが、やめてくれ」

走りながら、コリーがこちらを睨む。

「何言っただよ、馬鹿！ あきらめんなよ！」

私は首を振った。

「いや、諦めてはいない。むしろ逆だよ、コリー」

「はあ？ なに言っただ！」

私の、昨日までの望みは、踏ん切りをつけることだった。だが、

「実はこいつの正体を、私は知っているんだ。デン・クレイの小説にも出ていただろう？」

財宝へとつながる闇の番人だよ」

コリーが考えるような顔をしていた。私はさらに続ける。

「……実は昔、火吐きを探しているときに、その財宝の確かな証拠を掴んだんだが、あの時はそれどころじゃなかったんだな」

「そ、そうなのか？」

「でもお前のおかげで、やっとふっ切れた。私はこれから、自分の望みを追及するよ」

コリーは困惑しているように見える。自分の感じた死の感覚と私の説明の信憑性を、秤にかけているようだった。

「だけど」

私は畳み掛けた。コリーはすぐ近くまで迫っている。

「騙されたか？ 悪かった、迫真の演技だったろう？」

「いや、えっと」

「ああ、そうか！ いや、これは俺の財宝だ。おまえにはやれない。残念だがな」

「そ、そうじゃなくて、危険なんだから！ 死んじまうかも」

私は内心ほくそ笑んだが、実際に表れた表情は微笑み、程度のものだったろう。

「かもな。だが、さっきも言っただろう。私は自分の望みを追求すると。その結果命を落とそうとも、私は構わないんだ」

コリーが手を伸ばしてくる。私を掴もうとしてそのまましばらく走り続け、しかし最後には、手を降ろした。そして走ることをやめた。代わりに軽く手を振り、

「そう、か。じゃあ、行って来いよ」

「ああ。……お前も、二人で未永く暮らしていけ。約束だ」

「言われなくとも。いつか見てろよ！ 世界一の呉服屋にするつもりだ」

「はは、世界一の武器職人じゃないのか？」

「違げえよ、馬鹿！」

「悪い悪い。でも、そうか。良かった」

「良くねえよ、人をからかうんじゃない。だいたい」

目の前が、再び真っ暗になった。だから、私の別れの言葉も、コリーに届いたかどうかは分からない。だが、伝わったとは思っている。

「わがままを聞いてくれて、ありがとう。じゃあな」

実際のところ私は、この怪物の正体など知らない。あの気のいいコリーが私のことで悩まなくていいように、口からでまかせを言ったに過ぎなかった。

身勝手、かもな

つまり私は、コリーたちの未来に自身の望みを託したのだ。安い劇のような言い方をするならば、「私の分まで幸せになってくれ」と言つところだったか。

あの時点では、コリーは私の狙いに気づいたようには見えなかった。だがいつか悟られてしまうのではないか。そのときコリーは、どう思うだろうか。重荷に思うだろうか、改めて引き受けてくれるだろうか。

私には、それが大変気がかりだった。

私の生きた証。キヤスの生きた証。もう、私たち二人には残すことの出来ないものを、どうにかして残そうと、私はあの月の下で誓ったのだ。

深いふかい暗闇。

「さて、どうしようか」

声を張り上げて、何も響かない。だが、身体全体が微かに揺れているのは感じられた。未だ、この怪物はどこかへ移動しているのだ。内臓が上方に押し込まれる感覚で、落下しているのだと気づく。今度は着地だろうか。内臓が下に揺れる。

時間の感覚は当てにならないため、なんとも言えないが、あまり長い時間落下していた訳ではなさそうだった。

私をどうするつもりだろうか

私は最初、この怪物は取り込んだものを喰らうものと思っていた。だが、今のところ私は生きており、身体が溶け出す、といった異常も感じられない。

ひよつとしたら、本当に財宝があるのかも知れないな

もしそうなら、ずいぶんな喜劇だ。嘘から出たまこと、という言葉でよかっただろうか。

だがもちろん、自分の巢へと獲物を持ち帰っているだけなのかも知れない。

そして、それは唐突だった。

ん？

暗闇の中で、何かが見えた。目にごみが入ったのかとも思ったが、それは間違いなく、光だった。光はみるみる押し寄せ、目も眩むような奔流に変わった。そして、全身を刺すような痛みが襲う。

「っ！」

痛みのあまり息が出来なくなる。

なんだ、これは

幻覚だろうか。しかしこの痛みは、とても夢まぼろしのものとは思えなかった。

しかし痛みは消え去り、あふれる水が私の呼吸を遮っていた。光の奔流は、いつの間にか大水に変わっていたのだ。水の流れは容赦なく私を弄び、空気を奪う。

意識が遠のき、視界いつぱいに白い斑点があらわれた。

死ぬ瞬間に、視界に白点が見え出す、という話があったことを思い出す。

しぬ、のか

視界に広がる白い点は、次第にゆらゆらと動き出していた。その動きは、舞い落ちる木の葉のようにも見える。

私が死を覚悟した次の瞬間、白い粒が激しく舞い、風の音が響く

よようになる。白い点は掻き乱され、ひとつ、またひとつ消えていく。最後のひとつが完全に消え去ると、残るは暴力的な風だけになった。大水も消えている。

身体の自由が利かず、手足がばらばらになるかと思うほどの強風。思わず目を瞑ってしまふ。

私は、何か得体の知れない現象に遭遇している。しいてこの変事を言葉で表すならば、

魔法、なのか？　これが

風の音はいつの間にか止んでいた。代わりにパチパチと跳ね回る音が聞こえる。次第にその音は激しくなっていく。

音が気になり目を開ける。すると私は、自分が真っ赤な炎の渦の中にいることに気付いた。

熱い、焼けてしまいそうだ

私はあの火吐きの炎を思い出した。キャスもこんな苦痛を受けたのだろうか。

大量の火の粉が舞い、視界を遮る。

外套を被った見知らぬ者達が、巨大な怪物を取り囲んでいた。雷鳴が、太鼓を十基重ねて打ち込んだかのようにうるさい。轟音と共に、まばゆい雷光があたりを包む。

怪物がその光に乗じて一人の男に襲い掛かった。

「危ない！」

私は駆け出した。しかしちょっとも進まぬうちに地面が揺れだした。大地には何本もの大きな亀裂が入り、私は亀裂に落ちてしまふ。

落ちながら大地の奥底に目をやると、暗がりのなかに何かが見えてきた。

崩れた城壁、なだれ込む兵士、そしてその軍勢と戦う兵士たち。

そのなかに、どことなくコリーに似た、筋骨隆々の男がいた。腕中に火傷の跡があり、果敢にも、後退する味方の兵のしんがりをつとめているようだった。

私は叫んだが、ひどい怒号が飛び交い、その男には届かない。

何かの気配を感じて振り向くと、目の前に剣を振り下ろそうとする兵士が見えた。

「くっ！」

気がつくと、私は森の中にいた。

叫び声がして、そちらの方をみると、一人の青年がこちらに疾走してくるのが見えた。その後ろから、火の玉が飛んでくる。その火元は、なんと火吐きだった。

しかしその体躯は、私が止めを刺したものと似ても似つかぬ小ささ。

「……ない。あれを、書き上げるまでは、死ねない」

そう言いながら私のそばを通り過ぎる青年を見て、何か、引つかるところがあった。

デン、クレイ？

私が見た彼の原本の挿絵に、似た場面が描写されていたことを思い出したのだ。

訳の分からないこの状況で検討していたある仮説が、確信に変わっていく。

これは、過去の映像なのか？

火吐きが声を張り上げた。身がすくむというよりは、頭をなでてやりたくなるような声だった。

耳を澄ますと、鳴き声のほかにも何かか聞こえた。

>>まだ、死ねない<<

その声は、地の底から聞こえるようにも感じられたし、空の上から囁いているようにも感じられた。

それは、様々な人々の声だった。あの青年の声も、いつの間にか混じっていた。

>>まだ、死ねない<<

私は暗い冥くらい小部屋にいた。明り取りの窓は小さく細く、快適さなどという言葉とは無縁の部屋だった。

牢屋、か

一人の囚人がいた。ツギもあたっていない服を着ており、体中ひどい痣が出来ていた。落ち窪んだ眼には生氣というものが感じられない。

いや、本当にそうだろうか。

私はその男をよく観察してみる。この男はなんと、細身の剣を持つていた。これで脱走するつもりなのだろうか。この男は剣の柄から何かを取り出した。針のようだった。男はその針で剣身に、何かを一心に彫り込んでいた。

何を、書いているのだろうか

男の目には、何かが宿っていた。それは幽かな光。悲しみと絶望と怒りに翻弄され、それでもなお、なにかを持つ人の目だった。

足音が近づいてくる。男は慌てて針を剣にしまい、今度は剣自体を石壁の石のひとつをはずし、そこに隠した。

重い音と共にドアが開き、看守らしき男が現れた。腰には粗末な棍棒。後ろには、手を縛られた若い女性。囚人服というより、ぼろ衣をあてただけ、という姿だった。

看守は女性を中に突き飛ばすと、囚人の男を引っ張りだした。囚人の男には、抵抗するそぶりが全く感じられなかったのだが、看守は男を殴り倒し、早く起きると言っつて男の腹部を蹴りつけた。看守は男のそばに屈み、こう呟く。

「お前の最期なのに、これっぽちしかお返しできなくて悪いなあ」
よく見ると、看守の顔には丸い痣があった。

看守は女性に向き直り、死刑囚としてのなんとかいう生き様を雄

弁に語りだす。

あまりに悪趣味なその内容をあえて伝えはしないが、女性の顔は見る見るうちに青ざめていった。

女性は叫ぶ。

「私は何もやってない！」

「うるさいぞ、黙ってる！ お前の旦那は、お前が盗んだと言ってたぞ」

「違う！ 何かの間違いよ！」

看守は突如棍棒を抜き、女性を殴りつけた。何度も何度も、非道い罵詈雑言とともに。

「誰か、だれか……」

女性はうずくまり、ただ暴力を受けるのみ。頭からは血が流れだしている。

私が殴りかかる前に囚人の男が飛び掛り、看守に体当たりを食らわせた。手を縛られていたその男は、女性のそばに倒れこむ。

女性が彼を抱き起こすと、男は女性の耳元になにかを囁いた。絶対に第三者には聞こえないはずのその声は、こう言っていた。

「君の真実を、物語にしてつなぐんだ」

女性は男に問う。

「だれに？ どうやって？」

男は一層声を低めて言う。

「石壁の中に物語が綴られている。それから、誰への語りかという……」

男は、こちらを見た。

「君たち、未来に……」

おわり

そして、再びの暗闇。

だが、さつきとは一つ、違うところがあった。

それは、目の前に浮かぶ細身の剣。まったくの闇の中でも煌々と輝き、ゆっくりと回転している。

近づいて剣身を観察する。そこには鈍色の文字で、こう書いてあった。

” 我は始祖

朽ちゆく歴史の流れの中で 消えゆくひとつの塵芥

の器もて

されど折らせぬ我が剣 いのちの証し

時を貫き いつの日か ”

そして、その文字が消えると、代わりに小さな文字の群れがびっしりと浮かび上がった。

私はその文字達を、ひとつずつ追って行った。

長い永い話。様々な文体、多彩な文字。いつの間にか、剣に刻まれた文字は、その刃の面積を遥かに超えて、続いていた。

読み進めていく中で、気がつく。多種多様な物語の中で、ひとつだけ共通していることがあったのだ。

それは、文に込めた想い。皆触れれば切れそうなほどに、痛々しいまでに、綴られた物語の中で、懸命に自分の想いを叫んでいた。

しばらくの間物語を読み進めていた私は、ある異変に気づく。

文字が、欠けているのだ。ひどい箇所では、章のほとんどが消え

ている。不思議に思い、手にとろうとすると、闇が一層強くなる。あと少しで届きそうなのだが、指先から徐々に、感覚がなくなっていく。

まるで、闇に溶けていくかのような不思議な感触だった。

これは……

私はさらに手を伸ばす。すでに指の付け根までの感覚がないが、それでも、ぎりぎりまで伸ばしていった。

不意に、掌に剣の冷たい感触が伝わる。と同時に指先に感覚が戻り、私は柄を強く握った。

剣が輝く。まるで、まばたきをするかのように。そして私が疑問に思う間もなく、何かが耳元を掠めて剣の中に吸い込まれてゆく。ひとつ、ふたつ、徐々に加速しながら、剣の中へと飛び込んでゆくそれは、残像のように映像を見せた。

私はそれで、理解する。これは、先ほどの、過去の記憶なのだ。「うっ」「！」
轟音と共に、剣が震えだす。欠けてしまった物語を、懐かしむかのように。

やがて剣は、周りの闇をも吸い込みだした。絶対な無すら感じさせた闇が、あっけなく晴れてゆく。渦状になった黒い霧は、最後の抵抗のごとく私を取り囲んでいた。

気がつくとも私は、地下なのだろうか、なかなかの広さはあるが、窓がひとつもない、円形の部屋に佇んでいた。手には細身の剣。ほんやりと輝いている。

薄暗い中でも見える白い漆喰の壁、床は小石を敷き詰められ、平らに加工されていた。中央には黒い小石が円形に組まれている。

「戻った、のか？」

今見ているこれは、果たして本物なのだろうか。あまりに異常なことが続き、現実かどうかは私には判断できない。

扉が見えた。とりあえずと思いそこへ向かおうとして、私は自分

の置かれた状況を知る。

体が動かないのである。数歩と進まぬうちに膝が笑い出し、剣を支えにしようやく立っていられる程度だった。

「どっこいせ、と」

仕方がなく、その場に腰を下ろし、剣を置いて酒を飲む。

思わず出た掛け声に苦笑しながら、そばにある剣を今一度眺めてみた。欠けていた文字も元に戻ったようだ。何事もなかったかのようにならぬ光を放っている。

また口をつけ、ため息をつく。

「ああ……、しかし」

あの黒い怪物は、確かに何かを喰らっていた。剣に込められた、生命そのものでも言えるような何かを。

そして、剣は喰われたものを取り戻したようだが、私はどうなのだろうか。この全身の倦怠感を考えると、どうもそうではなさそうである。このまま意識を失えば、再び目を覚ますことができるかは分からなかった。

「……さて、どうしようか」

私は、目の前にある剣を見つめていた。

消えゆく者たちの、生きた証。時を越えて語り継がれる、存在の軌跡。

私はゆっくりと、剣の柄から針を取り出した。剣身に針をそっと当て、じつと静かに考えて。

「本当に、身勝手だな。私は」

自嘲を込めて言った口調は、予想に反して楽しそうだった。書き残すものは決めた。

それは、私の望んだもの。

書き出しはこうだ。

”私がこの物語を書き記すに至って、ひとつ言っておかなければならないことがある。それは ”

今、私は最後の文に取り掛かっている。

景気づけにと、酒を一気に逆さにしたが、落ちてきたのは一滴の雫のみ。舌打ちをして、それでも空の水筒は懐に戻し、ため息をつく。

すでに意識は朦朧としており、扉から漏れる陽光も、ぼんやりとしか見えなかった。その光は徐々に地下を照らしてゆく。誰かが扉を開けたのだろうか。

「いつたい、誰が？」

ついに周りは白一色になり、まぶしさの余り、目を閉じてしまっ。しかし、私はすぐに目を開けた。懐かしい、声が聞こえたからだ。

ねえ、聞いてる？

「ん？ どうした、キヤス？」

「さっきの花の名前、分かったよ」

くたくたではあったが、それを聞いて、私は顔をキヤスのほうに向けた。

床にすわり、ベッドにもたれかかって、組んだ腕の上に頭を載せているキヤス。ベッドで寝ている私と、ちょうど同じ視線の高さだ。「なんて名前だったんだ？」

キヤスはいたずらっぽく笑い、こう答えた。

「教えてあげない。自分で調べたら？」

「おい、それはないだろう？ 必死に助けたっていうのに」キヤスが本当に驚いたような顔になる。

「え！ じゃあ、花の名前が知りたくて助けただけなの？」

私は首を振り、笑って否定する。

「いや。お前に死なれなくなかったんだよ」

キヤスはそれを聞き、しばらく黙っていたがやがて、

「ねえ……」

「ん？」

「女の子だったら、ジウエラって付けようか？」

「！もしかして」

男は目を瞑り、最期の時を迎えていた。彼の見た幻想は、遙か古の時代、魔法が存在していた頃には、最も簡単な幻覚魔法のひとつに過ぎなかったが、男にとってそれは、なにより望んでいた魔法だった。

剣の光が途切れ、金属音が地下にこだまする。つい先ほど書き終えたと思われる文は、こう書いて結んであった。

第189章 奇跡を望んだ男の語り フール 著

*

夕暮れに染まる、ニヤメウイの町。五階建ての古びた宿にもその光は降り注ぎ、辺り一帯を紅く染めていた。玄関前のポーチには未だ大穴が空いていたものの、怪我をしたキャラバンの者たちもようやく出発し、彼らが泊まった安宿にも、東の間の静けさが訪れていた。

あかい風景の中、破損したポーチに目を奪われなかった者がもしあれば、そのそばに刺さっている剣に気が付くだろう。手前には石版が置かれ、その周りを花が埋め尽くしている。

そして石板には、こう記されてあった。

「お前の分まで、俺達が繋いでいく」

赤、紅、あか。夕日の中で区別できる色はそのぐらいだったが、唐突に花々が、元の色をとり戻した。何かの影が、花々に覆いかぶさったのだ。よく見ると、それは人影だった。

その人影は、刺さっていた剣に手をかけたようだ。恐らく左手を。嘘は、とつくにお見通しだったんだな」

その影の主は剣を引き抜いて、己の鞘に仕舞った。石板に何かを書き込んだ後、男は歩き出す。

どこへ向かっているのか、傍目には分からない。ふらつきながらも真っ直ぐに、男はどこかへと向かっていた。通りの端まで歩き続けた男は、最後に一度、ちらとこちらを振り向いた。

男は言う。

「私の望みは、果たした。未来はコリーたちにつないだ。それで、わがままを聞いてくれるならば……」

男はいったん区切り、姿勢を元に戻した。もう、こちらを見てはいない。

「キヤスにもう一度、会いたかったんだ。たとえ物語の中だけでも」
男の肩はわずかに震えており、口調は朗らかだった。

「身勝手な嘘、か？ 確かにな。でも、だからこそ」

もの語り、なのだろうか？

おわり

おわり（後書き）

これより下、あとがきです。

このあとがきは、本編中のネタバレを一切含みません

感無量

おかげさまで「誰かの語り」を完結させることが出来ました。これもひとえに皆さまのおかげです。

この「誰かの語り」は私のこのサイト様における処女作です。

なにか感じるどころがあったら、ぜひ乾燥ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4075e/>

誰かの語り

2010年10月8日15時43分発行